離さない（川上　弘美）

旅先で妙なものを手に入れた、とエノモトさんが言ってきたのが二か月ほど前だった。

画家兼高校教師のエノモトさんは、わたしの部屋に住んでいる。地区の自治会の役員を同期につとめたのがきっかけで、それ以来話すようになった。おいしいコーヒーいれますよ、と、ときどき電話をかけてくる。階段をとんとんのぼり、エノモトさんの部屋に行っておいしいコーヒーをごちそうになる。世間話をしばらくしてからまた階段をとんとん下り、自分の部屋に戻る。そのくらいの仲である。

エノモトさんの部屋はわたしの部屋とまったく同じつくりなのに、ずいぶん印象が違う。男所帯にしては整理がいっているが、画の道具やらエノモトさんの趣味のカメラやらそれらの分野の雑誌やらが部屋じゅうに置かれている。わたしの部屋よりもぜんたいに輪郭がくっきりしているような感じで、それが面白かった。

エノモトさんのいれてくれるコーヒーは「おいしい」と言うだけのことがあるものだった。手動のミルで豆を挽き、布で漉す。あたためたコーヒーカップにゆっくりと注ぐ。香りも味もたいへんよろしきものなのである。それなので、エノモトさんから「コーヒー」の電話があると、わたしは多少の用があってもうっちゃって階段をとんとんのぼるというわけなのだった。

そのエノモトさんからの「おいしいコーヒー」の誘いが、最近はないのである。二か月前、妙なものを手に入れたという電話をエノモトさんがしてきて以来、誘いがない。妙なものとは何なのか、エノモトさんは話さなかった。そのうちいずれね、とエノモトさんは言ったのだったか。桜が咲きはじめていた。わたしの部屋の前にも大きな桜の木が生えていて、風が吹けば花びらがベランダに散りかかってくる。

エノモトさんの部屋からは桜の木のてっぺんが見える。ベランダの花びらを拾ってきて、水を入れた皿に浮かしてみた。ほんのりと風に会えばいくらかの花びらを散らせる。ベランダの花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。そんなこんなしているうちに、エノモトさんから電話薄ももいろに色づいた花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。そんなこんなしているうちに、エノモトさんから電話がかかってきた。よかったら相談に乗ってもらえないか、とエノモトさんは言ったのだ。階段をとんとんのぼり、４０２号室のベルを押した。

扉を開けたとたんに何かの匂いがした。何の匂いだろうかと思いながら靴を脱ぎ、部屋を見まわした。雑誌、棚に大事におさめられたカメラ、画架、描きかけの画、いつものエノモトさんの部屋である。

「コーヒーいれましょう」とエノモトさんは言い、台所に立った。しばらくすると部屋に慣れて、最初に感じた匂いが何なのかますますわからなくなる。匂いがあったかどうかもわからなくなる。

「ささ、どうぞどうぞ」とエノモトさんはコーヒーカップを両手に持って台所から出てきた。少し痩せたか。

エノモトさん、元気だった？　と聞くと、エノモトさんは眉を寄せながら、

「元気といえば元気、元気でないといえば元気でない」と答え、笑った。

「これじゃ答えになってないね」そう言って、笑った。わたしも一緒に笑い、コーヒーを飲んだ。コーヒーはこのたびもたいそうよろしかった。

おいしいですね、と言うと、エノモトさんは頷き、すぐに、

「二か月前ね」と始めた。エノモトさんはもったいぶる質ではないのだ。少し下を向きかげんに座りながら、エノモトさんはこんなことを喋った。

二か月前、南方に旅をした。海沿いに南下していったのだ。帰る前の日に、漁村の小さな民宿に泊まった。いつも旅の最後の日には寝つかれないことが多くて、その日も波の音を聞きながら長く起きていた。すっかり目が冴えてしまったので、真夜中起き出して、海岸を歩いた。海岸沿いの道路にある電灯が浜を照らしていた。遠くの波打ち際に漁の網が投げ出してあった。どこか座れるところがないかと歩いているうちに、いつの間にか網のあるところまで来た。ぼんやり網を眺めると、網の中に何かがいるのに気がついた。中のものは動かない。まぐろよりは小さく、鯛よりは大きい。尾ひれが長い。ひれから腹にかけては大きな虹色のうろこに覆われている。腹から上にはうろこがない。白く、なめらかな、皮膚である。長い髪が上半身に巻きつき、髪の隙間から豊かな胸が見える。あちらを向いているので顔の造作はわからない。耳が髪の間からつきだしていた。こまかな虹色のうろこが、耳にもある。息をしているのかどうかと思って顔の見える側にまわってみた。目も口も固く閉じられている。白い柔らかい石に、刃物で切れ込みを入れたような目と口だった。鼻は、その石を少し練って高みをつけ薄くととのえたようか。しばらくじっと見ていると、肩が上下していることがわかった。生きているらしい。生きている、それは人魚であるらしかった。人間の大人の三分の一ほどの大きさの、それは人魚なのだった。

手に入れたものって、それじゃ、人魚なの？　驚いてわたしは叫んだ。

「そうなんだよ」とエノモトさんは言い、髭をしごいた。

あの、人魚って、そんなに小さなものなの。聞くと、

「ほかの人魚はどうだか知らないけどねえ」とエノモトさんは答えた。

二人でなんとなく顔を見合わせ、それ以上何を聞いていいのかわからなくなってわたしが黙っていると、エノモトさんは浴室の扉を開け、わたしを招き入れた。

人魚がいた。浴槽の三分の一くらいの高さに張られた水の中を、人魚が泳いでいた。端まで行ってくるりと反対側を向き、違う端まで行くとまた反対側に向く。何回でもそれを繰り返す。ゆっくりと、人魚は、浴槽の中を往復しているのだった。潮の匂いが強かった。さきほど玄関で感じたのは、この潮の匂いだったのだろう。人魚は長い髪を水の中にゆらめかせながら、こちらを見ることなく、往復を繰り返していた。

「こういうわけなんで」とエノモトさんが言った。

そういうわけか、と答えたが、何が「わけ」なんだか、人魚はわたしたちが入っていってからずっと往復しつづけている。

ずっとこういうふうに泳いでるの？　聞くと、エノモトさんは頷き、

「腹が減ってないときはたいがいね」と答えた。

人魚、と言いかけたがやめにして、このひと、とわたしは言いなおした。人魚が人語を解するかどうかわからなかったが、自分が人間以外のものに「人間」と呼び捨てにされたら気分悪かろうと思ったからである。「このひと」という指示が適切であるかどうかは難しいところだが。

このひと、ずっといるの？

「いるよ、ぼくが連れて帰って以来」エノモトさんは言い、浴槽の横に置いてある盥から鰺を一匹取り出して、人魚に手渡した。

人魚は泳ぎを止め、鰺の頭としっぽを両手でおさえた。浴槽の壁に寄りかかり、ちょうどハーモニカを吹くような様子で、鰺の頭からしっぽまでを口でなぞる。一回なぞるごとに鰺はきれいに削ぎとられてゆく。なんとも優雅な食べかただった。一片も食べ残すことなく、水を汚すこともなく、人魚は鰺を食べつくした。もう一匹渡すと、同じようにして食べる。五匹も食べただろうか。いつまでも人魚が鰺を食べるところを見ていたかったが、エノモトさんはそれ以上は渡さなかった。最後の一匹を食べてしまうと、人魚はふたたび浴槽を往復しはじめた。エノモトさんが浴室を出ていったので、わたしもしぶしぶ浴室を後にした。人魚のそばを離れたくなかった。

「出てきたくなかったでしょ」二杯めのコーヒーをいれてくれてから、エノモトさんが言った。

え？　と聞き返すと、

「浴室から」エノモトさんは言った。

そういえばそうだったかも。答えるうちに、人魚のそばを離れたくなかった気分をはっきりと思い出した。

「どうやらそういうものらしい」いにしえの昔から、人魚はそういうものと決まっているし、などとエノモトさんは言い、人魚がいかに人を惹きつけて離さないかをしばらく説明した。

二か月前の夜、エノモトさんは人魚を網からはずし、民宿の部屋に連れ帰ったのだ。あんがい人魚は軽かった。水で濡らした布でくるんだ人魚をビニール袋に入れ、エノモトさんはそのまま人魚を家まで連れてきてしまったのだという。交番に届けるなりなんなりすればいいようなものを、なぜ連れて帰ってしまったのか、そのときにはエノモトさんにはわからなかった。連れ帰るのが不自然であるということにも気がついていなかった。ただ、どうしても連れて帰りたく、いくら軽いといっても大きな荷物になる人魚を袋に詰めて連れてきてしまったのだ。

交番に届けるものなの？　と聞くと、エノモトさんは顔をしかめ、

「ぼくは真面目に話してるんだから、真面目に聞いてよ」と言った。

真面目に聞いてますよ、真面目に拾得物の処理方法について考えてるんだわよ。わたしも言ったが、エノモトさんはわたしの言葉にはとりあわず、話を続けた。

最初は、人魚の泳ぐ様子や魚を食べる様子が面白くて離れがたいのだと思っていた。ところがそのうちに、勤めに出るのがおっくうになってきた。朝魚をやると、もういけない。そのままずっと浴室に座りこんでいたくなる。ようやくの思いで勤めに出るが、働いている間じゅう、人魚のことが気にかかってしょうがない。一刻も早く終業時間がきてほしいと切望してしまう。生徒にものを教えていても昼飯を食べていても職員会議に出ていても、気はそぞろである。飛ぶように家に帰って浴室に行く。人魚はただ泳いでいるばかりなのだが、泳いでいる姿から目が離せない。画を描こうと思って画布に向かっても、すぐに浴室に足が向いてしまう。一日に何十回も浴室を覗く。そのうちに浴室に入りびたりになった。眠るときと食事のとき以外は浴室にいる。人魚のそばにいれば落ちつくのだ。人魚のそばで本を読んだり仕事をしたりする。

しばらくはその状態で満足していたが、ある朝どうしても人魚から離れることができなくて、欠勤してしまった。そのときから今まで五回も欠勤している。このままではいけないと思い、きみに相談することにした。

でも今はエノモトさん気もそぞろじゃないじゃない。わたしが言うと、エノモトさんは、

「必死にそういうふりしてるんだよ」と答えた。

「ほんとは今も人魚のそばに行きたくてしょうがない」

エノモトさんがそう言ったとたんに、わたしも浴室に行きたくてしかたなくなった。いてもたってもいられなくなった。どうしてそれほど人魚のそばに行きたいのかさっぱりわからないのだが、いてもたってもいられない。

しばらく二人でコーヒーを飲む様子をしていたが、二人ともコーヒーなどぜんぜん味わっていなかった。先に立ち上がったのがエノモトさんで、直後にわたしも足を踏み出した。二人で、争うように、浴室へ向かった。人魚はすいすい泳いでいた。涼しげな様子で、浴槽の中を往復していた。

お願いだから預かってほしい、このままでは自分はだめになってしまう。そう繰り返すエノモトさんの願いを何回でも断ったが、最後は断りきれなかった。いちばんいいのは人魚を海に帰すことだということをエノモトさんもわたしも知っていたが、二人とも知らないふりをしていた。これだけしか人魚に触れていないわたしがこのありさまなのだから、エノモトさんはどんなかと思うと、少しばかりぞっとした。最後は預かることになってしまった。

浴槽に水を満たして待っていると、エノモトさんが人魚を袋に入れて運んできた。袋から、人魚をするりと水に放つ。人魚はすぐに浴槽を泳ぎはじめた。エノモトさんのところにいるのと、ちっとも変わりがない。

さ、出ましょ。お茶でもいれるわよ。わたしがそう言っても、エノモトさんは浴槽の横から動こうとしない。エノモトさんの手を引っぱったが、それでも動こうとしない。

わたしが預かったんだから。そうわたしが言うと、エノモトさんはゆっくりと顔をあげた。

エノモトさんがわたしを睨んだ。目に、光がない。光のない目で、何を考えているんだか、エノモトさんはじっとわたしを睨んだ。いつまでも黙って睨んでいる。

どうしたの、エノモトさん。問いかけても、エノモトさんは黙っている。

ね、ここから出ましょ。夕飯でも一緒にどう。

それでもエノモトさんは黙っている。黙って、わたしを睨んでいる。怖くなって、先に浴室を出た。扉越しに耳を澄ませたが、人魚が浴槽の中を泳ぎまわる水音がするばかりだ。一時間待っても、エノモトさんは出てこなかった。部屋の中はしんとしていて、人魚のたてる水音ばかりが浴室の壁越しに響く。音をぜんぜんたてないのに、エノモトさんの気配が部屋じゅうに濃く漂っている。二時間たっても三時間たっても、エノモトさんは出てこなかった。あきらめて眠ろうとしたが、眠れるものではなかった。真夜中、突然大きな音がしたかと思うと、浴室の扉が開き、エノモトさんがころがるように出てきた。うわあ、というような声をあげながら、エノモトさんはわたしの部屋から走り出ていった。人魚を連れていったかと思い浴室を覗いたが、人魚はそこにいた。顔を横向きにして、ふわふわとはんぶん水に浮いている。自然にしていると、浮くらしい。コップに浮かせた桜の花びらのように、ふわりと水に浮きながら、人魚は眠っていた。

たしかに人魚から離れるのはつらかった。毎朝鰺か鰯か鯖を人魚に食べさせて、そのあとに会社に行かねばならないのが特につらかった。

人魚を預けられてから数日が過ぎたが、エノモトさんから連絡はなかった。最後に聞いた「うわあ」というエノモトさんの声が何回でも耳によみがえった。あれは何の声だったのか。わたしはいつもと変わりなく会社に行き家に帰り食事をとり眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め人魚のそばになるべく長く座り眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め人魚のそばになるべく長く座り人魚と共に眠った。

いつの間にか、わたしはエノモトさんと同じ状態になっていた。エノモトさんは夜眠るときには人魚から離れたと言っていたが、たぶん嘘だった。食事をとるのだって、きっと浴室の中だったにちがいない。食事の支度をする時間が惜しくて、できあいのものをわたしは買うようになった。掃除をしないので、部屋の中がほこりっぽくなってきた。カーテンもろくにあけず、洗濯もめったにせず、ただ浴室の中にいつづけた。椅子や毛布や食器を持ち込んで、浴室で暮らした。外に出ているときの記憶があまりなかった。誰と喋っても面白くなかった。電話が鳴っても出なかった。ただ、人魚だけを眺めて暮らした。これではいけないとときどき思ったが、すぐに思わなくなった。誰とも喋りたくなかったが、エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした。人魚が浴槽の中を泳ぐのを眺め、そのまま眠り、朝になるとふらふらと会社に行った。これではいけないと思う回数は次第に減っていった。エノモトさんが来たのは、これではいけないとぜんぜん思わなくなったころだった。人魚を預かってからたったの一週間後だった。

どしどし、と叩く音がした。ベルなど押さずに、直接扉を強く叩いてくる。ほうっておいても、止まない。しばらく浴室で息をひそめていたが、あまり長く続くので、浴室から出た。インターフォンで、どなたですか、と聞いた。扉を叩く音は止み、

「エノモトです」という声がした。

扉を開けると、エノモトさんが立っていた。

どうしたの、と言ったわたしの目は、おそらく人魚を預けに来て浴室から出なくなったときのエノモトさんの光のない目と同じだったことだろう。

どうしたの。

「人魚を取りに来た」

どうして。

「どうしてって、もともと預けただけだったし」

まだ、いいじゃないの。

まだ、と言いながら、わたしは後じさっていた。お茶でもいれましょう、と言いながら、足は浴室に向かっていた。エノモトさんは見のがさず、わたしの前に立ちはだかった。

「車、借りて来たから」エノモトさんが言った。

え、車？

「海に帰す」

そう言い放ち、エノモトさんはわたしを押しのけて浴室に入った。人魚を水の中から抱きあげ、いつの間に手にしていたのか、黒い大きなビニール袋に入れた。

だめ。だめよ。わたしは叫んでいた。袋をエノモトさんから取り返そうとした。しかしエノモトさんの力は強い。

「黒いから中が見えない。見なければ、いくらかいい。ぼくだって長くそばにいればまた元に戻ってしまうから。急ぐよ」エノモトさんは早口で言いながら、片手でわたしの手を引き、片手で人魚の入った袋をさげ、エレベーターに乗りこんだ。見たことのない緑色の車が道の端に停めてある。トランクに人魚の袋をしまい、エノモトさんはエンジンをかけた。

トランクなんかに入れたら、かわいそうじゃない。わたしが言うと、エノモトさんは、

「すぐに着くから大丈夫」と言った。

だめ。やめてよ。だめよ。エノモトさんの腕をひっぱりながらわたしが言ったとたんに車が走り始めた。

「腕、ひっぱると事故しちゃうよ。ちゃんとシートベルト締めて」エノモトさんにてきぱきと言われ、わたしはいやいやシートベルトを締めた。そのまま、海まで走った。

どこの海岸なのか、海岸沿いの土手には桜の並木があった。風はほとんどないのに、花びらがひっきりなしに散る。葉桜になっている木もあった。エノモトさんは人魚の入った袋を持ち、早足で波打ち際に向かう。うららかな日だった。鷗が河口から何羽も飛んでくる。日の光はさほど強くないのだが、海面がいやにまぶしい。海岸に人影はない。長く波に洗われたらしく輪郭のあいまいになった貝がいくつも落ちている。波の音を聞いていると、眠くなってくる。せっぱつまっているのに、眠くなる。

エノモトさんは決然とした足どりで歩いてゆく。

エノモトさん。呼びかけたが、振り向かない。

エノモトさーん。声を波に消されないように大きく呼びかけるが、そのまま歩いていってしまう。

水際で、エノモトさんは袋を下ろした。ていねいに口を開く。開いたとたんに水が砂浜に漏れ出る。水はそのまま砂に吸いこまれた。

帰すの、ほんとうに。エノモトさんのそばに走り寄って、わたしは泣きそうになりながら言った。

「帰す」エノモトさんは言った。しかし、その声はさきほど来の声よりも少し弱々しかった。

やめようよ。わたしが言うと、エノモトさんは目をしばたたいた。

「やめない」もっと弱々しい声である。

いいじゃない、別に悪いことしてるんじゃないし。わたしは誘う口調で言った。自分のどこからこんな声が出るのかわからなかった。

「まあそうだが」エノモトさんのまなざしが落ちつかない。

よく晴れてるし、このまま散歩して帰ろう。人魚も一緒に。甘い声だった。自分の声ではないみたいだった。いけない、こんな声を出してはいけない、と思ったが、やめられない。

「そうかもしれない」エノモトさんは催眠術にかかったみたいにぼんやりとした口調になっている。

いけない、いけない。そう思うのだが、声にならない。人魚は帰さなければいけない。そう言おうとするのだが、声が出ない。人魚は砂に横たわっている。からだ全体を砂にあずけるようにして、ぐったりと横たわっている。何を言うわけでもなく、どんな動作をするわけでもなく、しかしその人魚からわたしたちは離れられない。

「帰す」エノモトさんが絞りだすような声で言った。

口を開くとさきほどの甘い声が出てしまいそうなので、わたしは懸命に歯を食いしばった。無言で、エノモトさんと一緒に人魚をかかえ、水の中に入った。靴が濡れたが、かまっていられなかった。エノモトさんが尾ひれをつかみ、わたしは脇に両手をさし入れ、二人して人魚をかかえた。膝より上が水に漬かるあたりで、エノモトさんは、

「ここらにしよう」と言った。

「せえの」とエノモトさんは掛け声をかけた。こんなときに悠長な声を、と思ったが、何回エノモトさんが「せえの」と言っても、二人の手は人魚から離れないのだった。

むつかしいわよ。わたしが言うと、エノモトさんは少し笑った。エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした。

せえの、と、今度はわたしが言い、ついに人魚を海に放り投げた。虹色のうろこをきらめかせながら、人魚はとぽんと波間に沈み、そのまましばらく姿を見せない。

帰したね。そうエノモトさんに向かって言ったとたん、人魚がわたしたちの間にぽっかりと顔を出した。驚いて海中に尻餅をついた。肩まで水に漬かり、服も何もかもがびしょ濡れになった。

人魚は、しばらくわたしの顔を見ていた。エノモトさんのほうは見ない。わたしだけを見ている。こんなに人魚の顔を真近で見たのは、初めてだった。白磁に切れ込みを入れたような目がわたしをじっと見ている。

やっぱり離れられない、とわたしは知らずに言おうとしていた。

離れられない。

その刹那、人魚が口を開いた。赤く薄いくちびるを開いた。

「離さない」

人魚は言った。

はっきりと響く声で、人魚は言った。

わたしの顔を見据えて、人魚は言った。

エノモトさんがいつか出した、うわあ、という声が、わたしの口からももれ出た。

うわあ、と言いながら、わたしは海岸に向かって走った。水の抵抗があるうえに、服も濡れているので、思うような速さで走れない。夢の中で走っているような感じだった。エノモトさんがわたしの手を引いてくれている。なにがなんだかわからぬまま、走っていた。ようやく浜に上がって荒い息を吐いていると、もう一度背後から、

「離さない」

という声が聞こえた。

耳をふさぎ、砂に顔をうずめた。

どのくらいそうやっていただろうか、顔をあげるとエノモトさんが目の前にしゃがんでいて、わたしの体には毛布がかけられてあった。

人魚はいつの間にか去っていた。沖に漁船が見える。

桜が、海岸にまで飛んできていた。砂の上に、花びらがうすく積もっていた。淡雪のようだった。濡れたわたしの髪にも、服にも、桜の花びらがついていた。しばらく散る桜を眺めていた。エノモトさんと一緒にしゃがんで、降りそそいでくる桜の花びらを、眺めていた。翌日からしばらく高熱を出して、体調がようやく元に戻ったころには、桜はすっかり散っていた。エノモトさんに電話をして、礼を言った。

「おいしいコーヒーいれますよ」とエノモトさんが言うので、階段をのぼってエノモトさんの部屋に行った。葉桜になった桜の木のてっぺんが、エノモトさんの部屋の窓から見えた。

「これからの季節はね、葉が出そろって、鳥がよく来るようになるよ」コーヒーをいれながら、エノモトさんが言った。

鳥か。鳥はいいな。わたしがぼんやりと答えると、エノモトさんは笑った。

「人魚よりはいいよね」そう言って、笑った。

人魚、なんだったんだろう。つぶやくと、エノモトさんは真面目な顔をして、

「魅入られたね」と答えた。

エノモトさん、どうして人魚を帰すことができたの。聞くと、エノモトさんは、

「きみだって、最後は帰せたじゃない」と答えた。

風が吹いて、桜の枝が揺れた。海岸で見た桜を思い出した。人魚のすがたかたちも、人魚から離れたくないという気持ちも、はっきりとは思い出せなかった。桜が散る様子ばかりを克明に覚えているのだった。

エノモトさんも、人魚にあの言葉言われた？　と聞くと、エノモトさんは頷いた。

「きみの部屋に人魚を預けに行って、浴室に閉じこもっていた、あのときに、言われた」エノモトさんは静かな声で言った。

わたしたちはしばらく黙ってコーヒーをすすった。

「ずっと離さないでいるだけの強さがぼくにはなかったのかな」やがて、エノモトさんはしみじみした口調で言った。それはわたしもそうだったのかもしれない。ひっそりと答え、わたしは窓の外に視線を向けた。うすみどりの若葉が、どの木からも芽吹いていた。風が新緑を揺らしていた。わたしたちはいつまでもそれぞれに窓の外を眺めていた。